相生町における小学生の友だち関係意識と家族関係に関する調査研究

教育班（徳島教育社会学会）
伴　　恒信[1)]・森田　充彦[1)]・川又　里見[1)]
中津　　守[1)]・布川　美保[1)]・寒川　美穂[1)]
島田有加里[1)]・清水　美穂[1)]・藤本　有美[1)]
新居　裕子[1)]

1．調査・研究の目的

今日、子どもたちを取り巻く社会環境は様々な問題が生じている。そしてここ数年次々と発生する青少年の多様な問題行動は、子どもたちをとりまく学校・家庭・地域での人間関係をめぐるきしみが犯罪行為となって表面化しているといえる。まさに子どもたちの心の荒廃は深刻であるといわざるをえない。今日の子ども像に対し「弱いもの、異質なものは排除する、自分のみを守るために集団の問題にはかかわらない、自分が傷つかないために距離をおいた人間関係をとる」「自己中心的で善悪の判断に基づいて自分の欲望や衝動を抑えることができにくく耐性に欠けた子どもが目立っている」などという数多くの指摘がある。そして、現代の子どもたちに対するこうした指摘の背景には、家庭生活や日常生活のあらゆる場面で、いろいろな生活体験を通して、他者や異質なものに対して受容感や信頼感、柔軟な対応体験をもってきたかということが大きく影響するといわれている。

そこで、実際子どもの現状はどうなのだろうか。本調査では質問紙調査を通して、子どもたちにとって生活の中で大きな位置を占めている学校現場における友だちとの関係・家庭における家族との関係・子どもの生活経験・子どもの自己意識など、子どもたちの人間関係・生活体験等の実態を把握することを第一の目的とした。

また、本調査では、友だちとの関係づくりにおいて、学校生活・家族との関係・日常の具体的行為や心情等との関係性を分析した。そしてこれをもとに友だち関係づくりにおいて他人への信頼や思いやりをもった積極的な関わりを志向しているのか、あるいは自己中心的なものを志向しているのか、またそれらの志向が家族関係や生活経験等とどう関連しているかについて考察することを第二の目的とした。

2．調査方法の概略

平成12年７月上旬に相生町立西納小・平野小・延野小・日野谷小のそれぞれ４・５・６

1）鳴門教育大学

年生を対象として質問紙調査を行った。有効回答数は、西納小・平野小・延野小・日野谷小で計111人である。

質問紙は「友だち関係」「家族関係」「生活経験」「自己意識」の各領域で構成し、回答方法は、４段階評定法（とてもそう・わりとそう・あまりそうでない・まったくそうでない等）を用いた。

３．調査・研究の結果と考察

１）相生町の子どもたちの生活実態

相生町の子どもたちの友だち関係・家族関係・生活経験・自己意識について調べた結果を単純集計して考察を加える。

⑴　友だち関係について

学校は、子どもの生活の中で大きな位置を占めており、そこで関わる友だち関係は子どもの日常生活に多大な影響を及ぼすといえる。

そこで相生町の子どもたちが友だちに対しどういう気持ちを持っているのか、どう関わろうとしているのかについて質問した。結果は以下の通りである（図１）。

友だち関係についての質問として、「悩みを相談できる友だちがいるか」については、「とてもそう」「だいたいそう」と回答した子どもが半数以上であった。また「友だちと一緒でも楽しくない」という問いには、「ぜんぜんそうでない」「あまりそうでない」が半数以上であった。「ひとりぼっちの子を誘うか」については「とてもそう」「だいたいそう」が半数以上を占めていた。つまり、子どもたちは、一人より友だちとの関わりを大切にしたいと思っており、友だちを誘い合ったり、友達との関わりに楽しさを求めているということがうかがわれる。

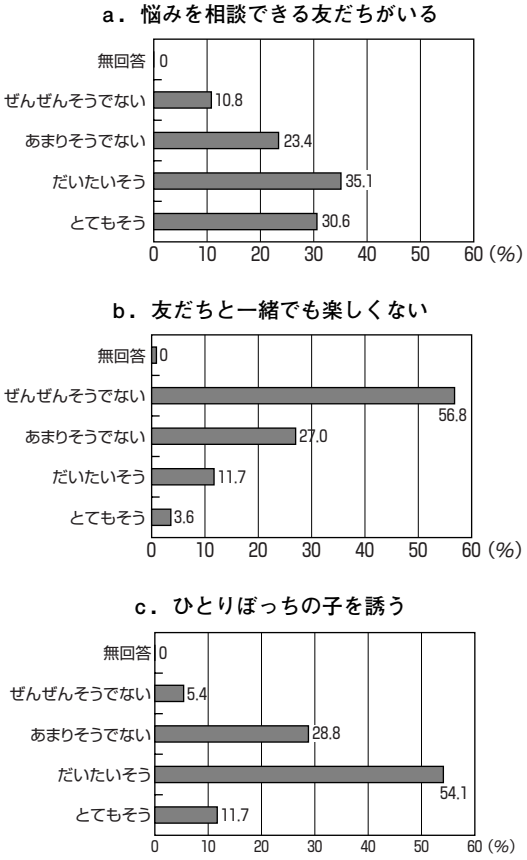

図１　友だち関係

一方、具体的な関わり方にふれてみると（図２）、「友だちを注意するかどうか」につい

ては、「とてもそう」「だいたいそう」と答えた子どもが約56%「あまりそうでない」「ぜんぜんそうでない」と答えた子どもが約44%であった。つまり友だちに注意する人と注意しない人が半数ずついるといえる。また「自分の考えはあまり出さないほうだ」という質問に対し「あまりそうでない」と答えた子どもが一番多く45%、次に「だいたいそう」と答えた子どもで33%であった。「とてもそう」と答えた子どもは一番少なく4.5%であった。また、学校での生活において「ほめられることをすると、周りから嫌われそう」という問いに対し「あまりそうでない」が28%「全くそうではない」「だいたいそう」がそれぞれ30%であった。「クラスの代表はできればやりたくない」という問いには「あまりそうでない」「全くそうでない」と「だいたいそう」「いつもそう」が半数ずつに分かれる結果がでた。これらのことから、自分と友だちの関係のあり方に気をつかいながら友人関係を築こうとしている子ども像がうかがえる。

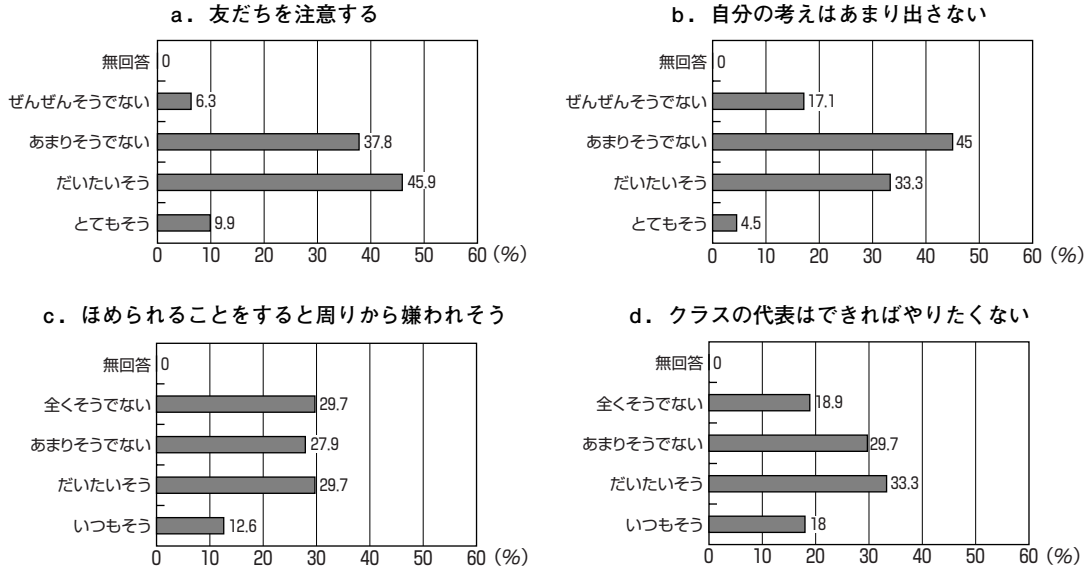

図２　友だち関係

⑵　家族関係について

子どもの成長発達において、家族の影響力は大きいといわれる。家庭教育の重要性と家族のコミュニケーションのあり方が問われる今日、相生町の家庭における家族関係はどのような状況にあるのか、子どもたちは、家族に対してどういう感情を持っているのかについて質問した。結果は以下の通りである（図３）。

家庭における家族の対応についての質問として「失敗しても励ましてくれる」「自分の成長を楽しみにしてくれている」「私の話をよく聞いてくれる」「家ではありのままの自分をだせる」これらの問いに対し、「いつもそう」「だいたいそう」と回答した子どもたちが

7割をこえていた。これらのことから、家族の人から受け入れられていると感じている子どもが多く、温かい関係が築かれている家庭が多いことがうかがえる。

一方「家族の人は他の人と自分を比較する」という問いに対し、「いつもそう」が22%「まったくそうでない」が23%であり「だいたいそう」が29%「あまりそうでない」が24%、つまりそれぞれ両意見に半数ずつ分かれる結果がでた。

これらのことから、家庭において、他の人とよく比較されていると感じている子どもと、あまり比較されていないと感じるこどもが半数ずついるということがうかがわれる。

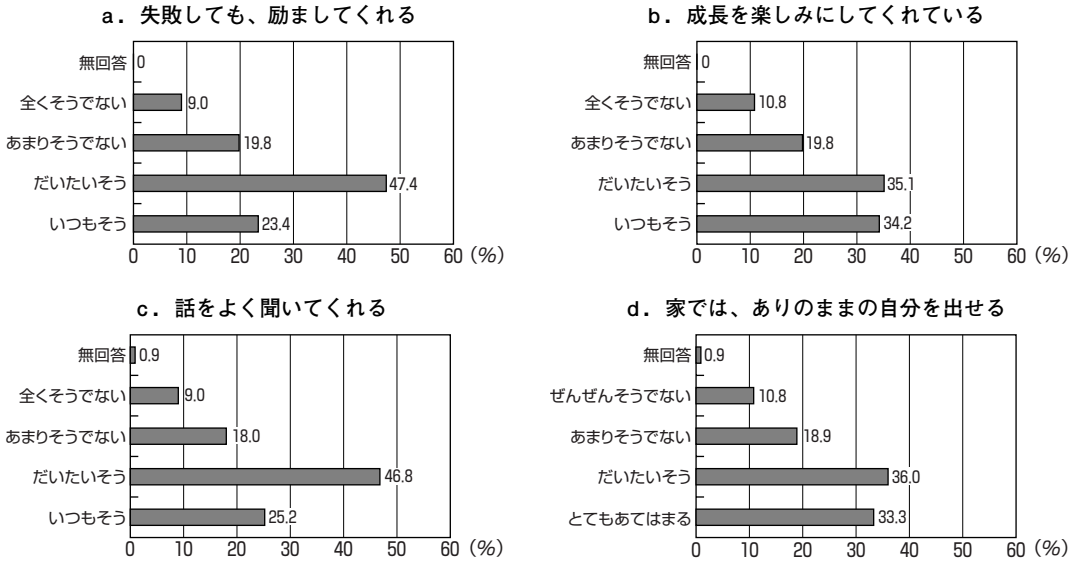

図3　家族関係

(3)　生活経験について

子どもたちにとって地域社会との関わりや異年齢世代との様々な生活体験は重要であるといわれている。

そこで相生町の子どもたちが地域社会との関わりや異年齢世代に対しどう感じているか、また現状はどうかを質問した。その結果は以下の通りである（図4）。

「ペットの世話をしたこと」「赤ちゃんをだっこしたり、小さい子のお遊び相手になったこと」については「よくある」「ときどきある」を合わせると7割以上であった。これらのことから、動物や小さい子との関わりは多く経験しているといえる。

一方「よその人に叱られたこと」「体の不自由な人やお年寄りの手助けをしたこと」「道路や遊び場を清掃したこと」については、「あまりない」「ぜんぜんない」を合わせると7割近くであった。しかし「地域の行事に参加したくない」という問いに対しては「ぜんぜんちがう」「あまりそうでない」を合わせると8割以上であった。

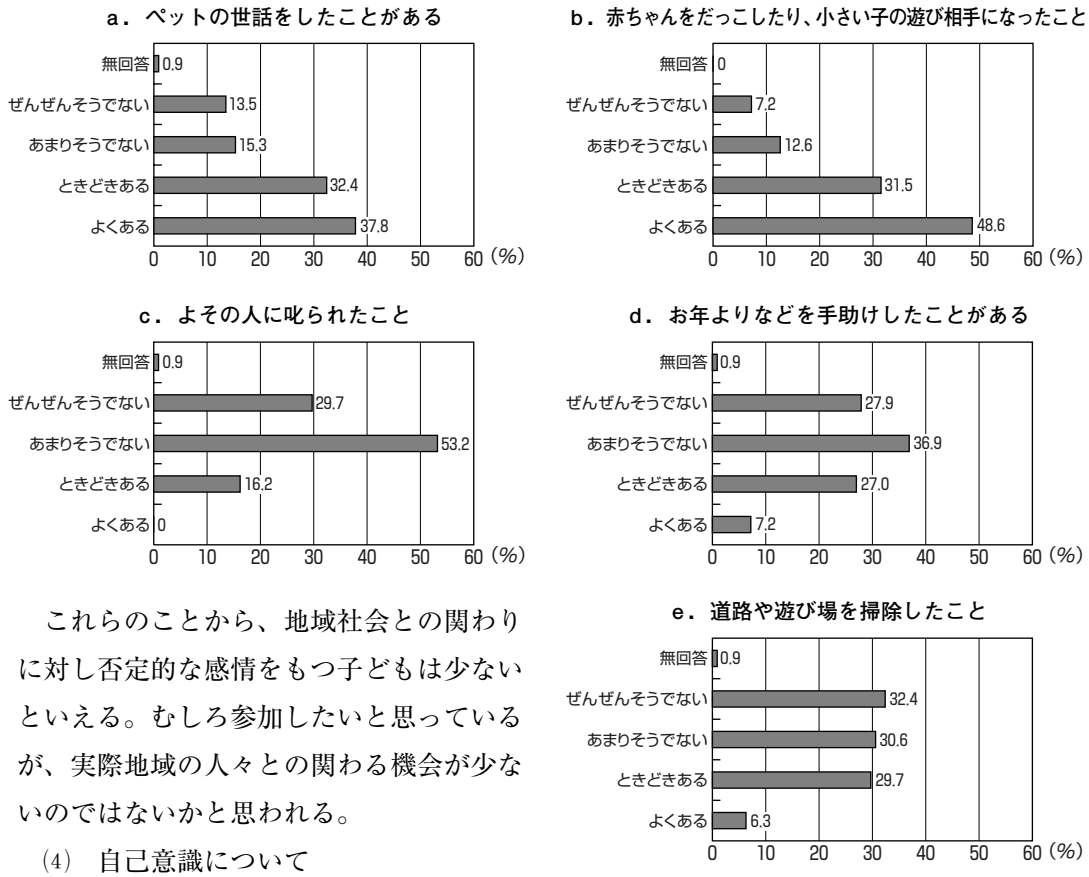

図４　生活経験

これらのことから、地域社会との関わりに対し否定的な感情をもつ子どもは少ないといえる。むしろ参加したいと思っているが、実際地域の人々との関わる機会が少ないのではないかと思われる。

(4)　自己意識について

子どもたちが自己意識を持ち、自分を肯定的にみることができるということは、人間関係を築く上で重要であるといわれている。そこで相生町の子どもたちの自己意識について質問した。結果は以下の通りであった（図５）。

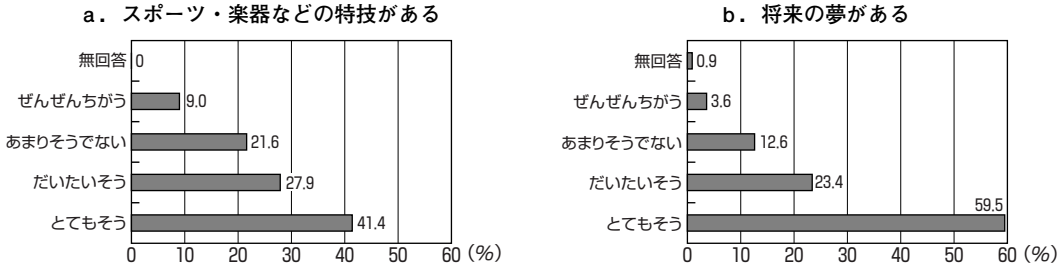

図５　自己意識

「スポーツ・楽器などの特技がある」「将来の夢がある」という問いに対し「とてもそう」「だいたいそう」を合わせると７割であった。これらのことから自分自身に対し肯定感や希望感をもっている子どもが多いということがうかがわれる。

2）因子分析結果

本調査では、先にも述べたように、友だち関係づくりに関わる意識と行動に焦点を当てて調査項目を設定した。この結果をもとに、友だちとの関係づくりの傾向をつかむために、SPSS統計パッケージを利用して、因子分析を行った。（表１）。

なお、因子分析抽出法及び回転法は、それぞれ主成分分析法、バリマックス法を用いた。

表１　友だち関係についての因子分析結果

項　　目	因子１	因子２	因子３	因子４
悩みを相談できる友だちがいる。	－.08238	－.12880	.10956	.76545
悪いことをしているのを見たら、注意している。	－.11798	－.36346	.73855	.02158
一人ぼっちでいる人を見かけたら、誘う。	－.37353	－.03202	.57288	.12410
大勢で遊ぶより気のあう子とだけ遊ぶ。	.36928	.49252	－.24857	－.16953
友だちと一緒だと、よくないことでもしてしまう。	.43599	.14936	－.16879	.62464
仲良くするために、自分の考えは、あまり出さない。	－.06347	.11768	－.72450	.05534
クラスの中に一週間ぐらい話さない人がいる。	.43950	.40016	.04490	－.17614
友だちと一緒より、一人のほうが気が楽だ。	.37968	.63964	－.05103	.10857
友だちに注意されたら、腹が立つ。	.65588	.23001	.02005	.03163
自分は成功して友だちが失敗していると、少し気分がいい。	.81705	.01805	－.03037	.05202
いらいらすると弱い友だちをいじめたくなる。	.73284	.20249	－.10777	.02772
友だちは私に意地悪をしたり悪口を言うことはない。	－.17268	－.03914	.03919	.04250
暗いと思われないように無理して明るくしている。	－.02574	.61821	－.27252	.01728
友だちと一緒にいても、何となく楽しくない。	.45851	.65351	－.09310	－.24960
先生にほめられることをすると嫌われそうに思う。	.32108	.55805	－.02581	.20055
初めての人でもすぐ友だちになれる。	.14366	－.04350	.60100	.04232
クラスの代表や学級委員は疲れるのでしたくない。	.41812	－.11808	－.40127	－.41731
仲の良い子が休んでいたら、他のグループに入っていける。	.11677	－.48543	.05162	－.00195
固有値1.1　　寄与率	25.9	10.8	8.0	6.5

次に、因子を構成する項目の特徴をとらえ、因子の指標化を試みた。因子分析の結果は、以下の通りである。因子１は、「自分は成功して友だちが失敗していると、少し気分がいい」、「いらいらすると弱い友だちをいじめたくなる」、「友だちに注意されたら、腹が立つ」、「友だちと一緒にいても、何となく楽しくない」、「クラスの中に一週間ぐらい話さない人がいる」等の質問項目に共通する因子である。これらはいわば、自分本位的な友だちとの関わりを示している。そこで『自己本位的関わり指標』と名前をつけることにする。

因子２は「友だちと一緒にいても、何となく楽しくない」、「友だちと一緒より、一人のほうが気が楽だ」、「暗いと思われないように無理して明るくしている」、「先生にほめられることをすると嫌われそうに思う」、「大勢で遊ぶより、気のあう子とだけ遊ぶ」、「仲の良い子が休んでいたら、他のグループに入っていける」等の項目で高い負荷量を示している。これらは、外面的には友だちと同調・同化しながら、内面では孤立感や疎外感を持つ傾向を表している。そこでこれを『同調・回避指標』と呼ぶことにする。

因子３は、「悪いことをしているのを見たら、注意している」、「初めての人でもすぐ友だちになれる」、「一人ぼっちでいる人を見かけたら、誘う」、「仲良くするために、自分の考えは、あまり出さない」という、積極的に友だちに関わっていこうとする傾向を表して

いる。そこでこれを『積極的関わり指標』と名付けておく。

因子４は、「悩みを相談できる友だちがいる」、「友だちと一緒だとよくないことでもしてしまう」という、２つの質問項目に共通する因子である。「よくないことでもしてしまう」という項目に関する行為の善悪は別として、悩みの相談ができることから、友だちとの連帯感や信頼感を持つ傾向を示している。そこでこれを『友だち信頼指標』という言葉で表現する。

３）クロス集計結果

子どもの友だち関係に影響を及ぼす要因として、多くの要因が予想される。本調査では、先にも述べたように「友だちとの関係」「家族との関係」「生活経験」「自己意識」の各領域に焦点づけて調査項目を設定した。人間関係のあり方として家族関係がその後の交友関係に及ぼす影響は強いと予想される。特に家族との関係がどのように関わっているのかを見るために、先の因子分析結果と家族関係についての質問との関連をクロス集計を通して考察を進める。以下の図において、各グラフ表題の「　」内は質問項目を簡略表現したものである。縦軸の「高い」「やや高い」「やや低い」「低い」は、各因子についてそのように回答した子どものグループを４段階の度合いで表し、横軸帯グラフはそのグループ内で各質問について「高い」「やや高い」「やや低い」「低い」と回答した子どもの割合を表現している。なお、以下の分析では、クロス集計結果の特徴をより明確に把握するため、一つないし二つの度合いのグループを取り上げて説明していく。

⑴　因子１とそれに関連する影響要因のクロス集計結果

因子１は、『自分本位的かかわり指標』と名付けたものである。

図６では、この因子１について「低い」「やや低い」度合いの子ども（相手を思いやって友だちと関わっている子）ほど、家庭でも他人と比較されずに受け入れられていると感じている子どもの割合が高いことがわかる。

また、図７では、因子１の度合いの「高い」子ども（自分本位的な友だちとの関わりをしている子）は、家庭での心の安定の低い傾向の子どもが多い。逆に度合いの「低い」子ども（相手を思いやって友だち

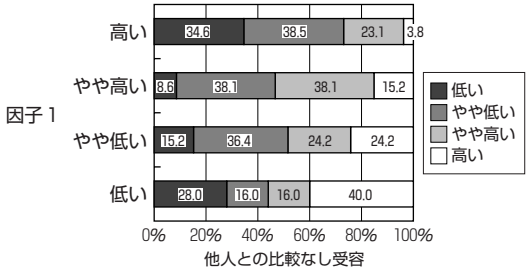

図６　因子１と「他人と比較なし受容」

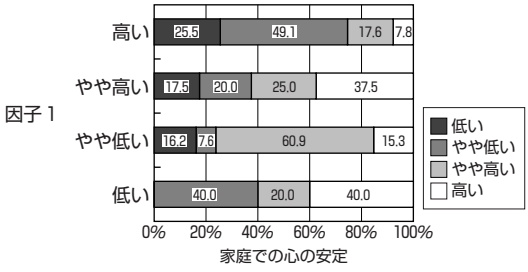

図７　因子１と「家庭での心の安定」

と関わっている子）には、家庭での心の安定の高い子どもの割合が多い。

いずれにしても、受容的な養育態度で育てられている子どもは、友だちに対しても受容的な関わり方をする傾向にあることがわかる。

⑵　因子２とそれに関連する影響要因のクロス集計結果

因子２は、『同調・回避指標』と名付けたものである。

図８では、この因子２について度合いの「低い」子ども（友だち関係で疎外感や孤立感を抱きにくい子）は、友達や遊びへの親からの寛容さを感じ、言い換えると、家庭で友だちや遊びのことについてやかましく言われていないことがわかる。

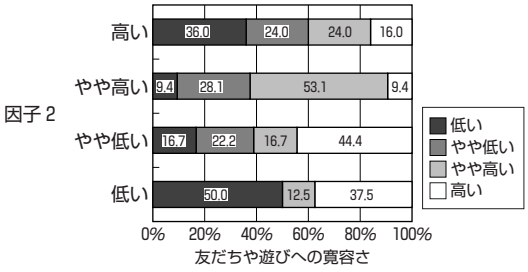

図８　因子２と「友だちや遊びへの寛容さ」

また、図９では、因子２の「低い」度合いの子ども（友だち関係で疎外感や孤立感を抱きにくい子）は、家族への正直さが「高い」、つまり、家族にうそをつくことが少ない傾向にある。これは、図８で表した結果とも関連して、友だちや遊びの様子をありのままに家族に話しやすい雰囲気があるのではないかと考えられる。

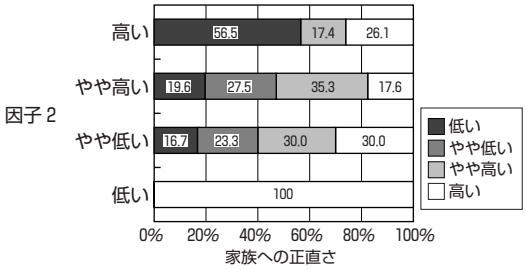

図９　因子２と「家族への正直さ」

さらに図10では、因子２の度合いの「低い」子ども（友だち関係で疎外感や孤立感を抱きにくい子）は、家庭での心のつながりを「高い」と感じている。言いかえると、家庭でも疎外感や孤立感を抱いていない。いわば、因子２『同調・回避指標』が「低い」子ども（友だち関係で疎外感や孤立感を抱きにくい子）は、支配的または干渉的な養育態度を受けていないと言える。

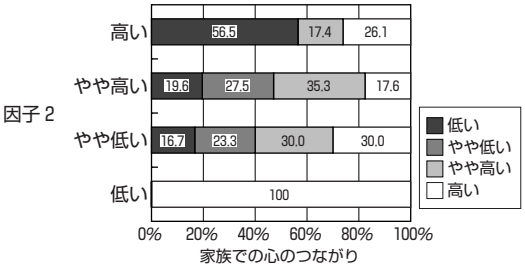

図10　因子２と「家庭での心のつながり」

⑶　因子３とそれに関連する影響要因のクロス集計結果

因子３は、『積極的関わり指標』と名付けたものである。悪いことは注意したり、一人の子を誘ったりして友達に積極的に関わっていこうとする傾向である。この指標について、クロス集計を行ってみると、図11のように因子３の度合いの「高い」子ども（積極的に友

だちに関わろうとする子）ほど、高い割合で、「家の人が旅行準備」は「低い」、つまり、家の人が旅行準備をしてくれないと回答していた。しかし全般的には、家族関係との相関を示す顕著な有意差は見られなかった。

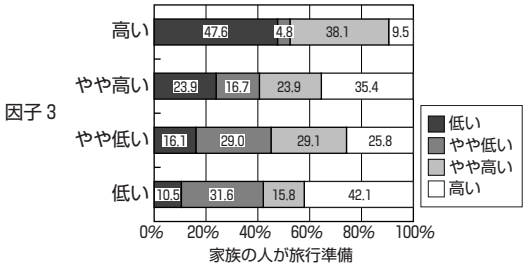

図11　因子３と「家族の人が旅行準備」

⑷　因子４とそれに関連する影響要因のクロス集計結果

因子４は、『友だち信頼指標』と名付けたものである。友だちに対する信頼感や連帯感は、家庭での家族関係とどのような関連があるだろうか。

図12では、この因子４について度合いの「高い」子ども（友だちとの信頼感・連帯感の強い子）は、失敗したとき家族から励ましを受けることが少ない。

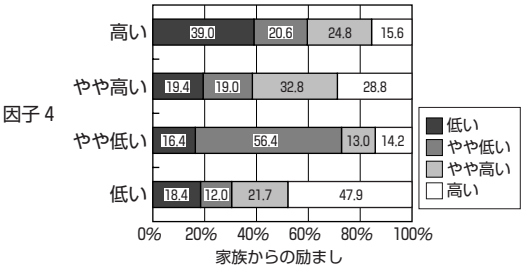

図12　因子４と「家族からの励まし」

また、図13のように、因子４が「高い」高群の子ども（友だちとの信頼感・連帯感の強い子）は、勉強や学校のことを家庭では家族から何も問われない傾向が見られる。言い換えると、友だちとの信頼感や連帯感を感じている子どもの中には、家族とのつながりが十分に感じられず、その代償を友だち関係に求めている子どもがいることも考えられる。

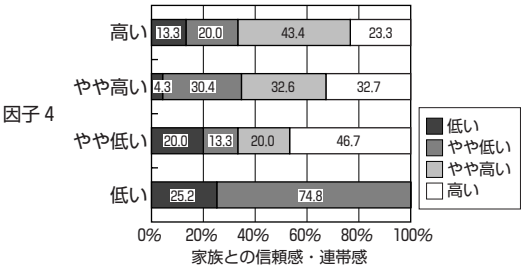

図13　因子４と「家族との信頼感・連帯感」

これらの結果から、友だちとの信頼感・連帯感を強く感じている子どもの場合には、家族との信頼感・連帯感はどうであるのか、背景を十分に把握する必要がある。

４．まとめと今後の課題

本研究では、質問紙調査を通して相生町小学校高学年の実態を把握し考察を進めてきた。

友だち関係については、友だちとの関わりを大切にし、友だちとの関わりに楽しさを求めていることが確認された。これは、たとえば小集団活動や全校活動など小規模校の特性を生かした学校教育が取り組まれていることも大きく影響していると考えられる。

家族関係については、家庭の教育力が改めて問いなおされている現在、相生町の多くの

子どもが家族から温かく受け入れられていると感じている。

生活経験については、地域社会や異年齢世代との関わりに対して否定的な感情を持つ子どもは少ない。地域のさまざまな活動に参加する機会をさらに増やしていくことが必要だと思われる。

自己意識については、自分自身に肯定感や希望感をもっている子どもの姿が見受けられた。おそらく、家庭においても学校においてもよりよい人間関係を築き、より豊かなコミュニケーションを図れていることが、積極的な自己意識につながっていると考えられる。

さらに、友だち関係に影響を及ぼすさまざまな要因の中で、家族との関係について焦点を絞って考察を進めた。相生町内小学校高学年の全体的な傾向について単純集計をもとに分析を進めた際、自己を肯定的にとらえて積極的に友だち関係をつくろうとする子どもたちの姿が浮かび上がってきた。その背景には、言うまでもなく家庭や学校の強い教育力の存在がうかがえる。家庭において受容的な態度で育てられた子どもたちは、友だち関係においても友だちを思いやり、信頼感や連帯感を持って関わろうとすることが確認できた。

本研究では解明できなかったこととして、そのような受容的な態度で育てられることが必ずしも積極的な友だち関係づくりに直結している訳ではないのではないか。そこには、具体的な友だち関係づくりのスキルや向社会的行動につながる実践力育成等が要因として関わってくるのではないか等が推測できる。したがって、これら未解明の要因をさらに研究することが今後の課題である。

最後に、この調査の実施にあたって、調査の対象としてご協力いただいた小学生の皆さん、また調査準備の段階でご協力いただいた相生町内小学校の先生方、教育委員会の皆さんに、厚くお礼を申しあげたい。

（文責　寒川・布川・中津）